進路だより　第８０６号
令和６年１１月１４日(木)
多治見高校　進路指導部

人間は機械ではない。人間は「流れ」だ。

10 月から 11 月にかけて６回の進路説明会（各学年の生徒対象と保護者対象）を実施しました。高校生にとっては文理を選ぶこと、さらに「学問」を選ぶことは簡単ではなさそうです。しかし、どの学問を選ぼうとも「自分」と「世の中」について知ろうとすることに変わりはありません。いま選ぶ学問によって多少の方向性が変わり、短い目でみた損得があるように感じる人もいるでしょうが、長い目でみれば、人は自分のやる気が最も起きるような道を選んで歩む中で、考えを深めていきます。だからこそ、何かを成し遂げて有名になったような人々は、学者だけでなく経営者でもスポーツ選手でも、最後はみな似たことを語り始めます。「自分」とは何か、「人間」とは何か、「世の中」とは何か、自分を取り巻く「環境」とは何かです。

今回、タイトルに記した言葉は、正確には「生命は機械ではない。生命は流れだ。」と言ったルドルフ・シェーンハイマー(1898-1941)という生化学者の言葉です。進路を考える皆さんにむけて、私が「生命」を「人間」に置き換えました。私がこの考えに出会えたのは「生物と無生物とは何が違う？」という問いを研究してきた福岡伸一教授のおかげですが、福岡教授が考えてきたことにふれると、いろんな学問や関心から世界を拡げることができます。

もともとは昆虫が大好きだった福岡少年は両親からもらった顕微鏡で蝶の羽を観察して、カラフルな桜の花弁を並べたような細胞に魅了されます。生き物をミクロの世界で見てきたこととシェーンハイマーとの出会いにより、人間は、ぱっと見は固体のように思えるが、実は流体だったと考え始めます。それは食事などを通して摂取したものが体の一部となり、古くなった細胞が排泄されている様子をミクロの世界で突き止めたからです。人は骨や脳細胞まで常に自分を壊して新しく取り換えており、まるで流れる水のようです。外から見ればずっと変わらない一人の人物であり続けているけれど、実は細胞レベルでは去年の自分と今年の自分はまるで別人だというのです。難しい言葉では「動的平衡」と呼ばれるこの理論は、高校生にとっては朗報です。変わりたいのに変われないと思い込んでいる自分は細胞レベルではすっかり新しい自分になっている訳です。性格を変えることは時間がかかりますが、習慣を変え、よりよい細胞からできた自分を作ることはできます。教授の講義を聞くと、医療や美術に関心がある人にも響くものがあります。医療では、人間を機械のパーツを組合せたものと捉える人間観が「脳死」と「脳始」問題につながる話。美術では、『真珠の耳飾りの少女』を描いたフェルメールが、顕微鏡を発明した人の近所に住んでいたらしく、ミクロの世界を覗いたことがある画家だったかもしれないという話です。「学問」はあなた自身の人生という旅を助けるものです。心惹かれる方向へ進んでみましょう。　（文責：桑原）

♫3年の窓♫

「幸福」とは

2、3年生で使う国語の教科書の一つに「論理国語」がある。3年理系で最後に読むのは小浜逸郎（こはまいつお）（入試に頻出）の「人はなぜ働かなくてはならないのか」だ。この問いは否定的な傾向を帯びるという理由で、すぐさま「なぜ人は働くのか」に変えられる。いくつかの予想される答えに異を唱え、筆者は「労働の意義を根拠づけているのは、私たち人間が、本質的に社会的な存在であるという事実そのもの」と述べる。

そこで、ある人の話を思い出した。日本理化学工業の社長さんの言葉である。「日本理化学工業は全従業員 93 人中 67 人が知的障がい者（うち重度の障がい者は 25 人）が働いている、チョーク／キットパス製造を主とした会社です。（2023 年 12 月現在）」（HPより）。知的障がいのある学生の就労体験を受け入れたことがきっかけで、障がい者雇用を求められた社長さんは、禅寺のお坊さんからある法話を聞く。「人間の究極の幸せは、愛されること、ほめられること、人の役に立つこと、人に必要とされることです。それはみな、働くことで得られます。」それならば、障がい者を雇用しようと決心して今に至る。そして、知る。障がい者にとって働きやすい環境は、他の人にとっても働きやすい環境である、と。

そんなことを思い出していたら、もう一つ思い出したことがある。以前、本校に勤務していたときのこと、当時私は3年生の担任をしていた。進路説明会はオンラインではなく文化センターで行われ、各担任も一言ずつ述べる機会があった。私の前の担任の「いい大学へ行って」という発言に、「いい大学とは何か、いい仕事をする大学である」と反応した。その時、「関関同立」を目指す人からは下に見られるある大学が、環境問題に関する取り組みを発表していた。「いい仕事をしていますね。」と私は言ったのだった。

いい人間になって、いい仕事をしたいよう。幸福でありたいよう。幾つになっても思うのである。　**（文責：谷口）**

♫2年の窓♫

Know what you want

みなさん、英語の週末課題”Concerto”読めていますか？人間図書館の話、賢いオウムの話、色が人の心理に与える影響の話、「ゾーン」の話などなど、科学的な内容、人の身体/心理にまつわる内容が多く取り上げられていて、とてもおもしろいですよね。ちなみに今週の話は「フェーン」の話でした。体調が悪いあなた、いまいち調子が出ないあなたもフェーンの影響かもしれませんよ。

さて、１つ前の Section5 ”Shopping Wisely”では賢い買い物の仕方について書かれていましたね。値切れるチャンスを逃がしたり、衝動買いしたりすることをさけるために、物を購入するときには、① think before speaking（話す前に考える）、② know what you want（自分が欲しいものを分かっている）の２つを覚えていることが大切と紹介されていました。実はこれ、買い物だけではなく、人生を送る中でもとても大切なことだと先生は思います。**①行動する前に深く考えましょう。その行動が自分や他人にどう影響を与えるのか、どんな結果につながるのか、先を見越して行動する力を持っている人は強くなります。**
②自分が本当に欲しいものを分かっている、もしくは know what you want to do（自分が本当にしたいことを分かっている）状態であるかどうかで、人生は大きく変わります。人生には「したいこと」「しなくてはいけないこと」「してもしなくても本当はどっちでもいいこと」が混在しています。大切なのは、「しなくてはいけないこと」をこなしつつも、「したいこと」をどんなときも忘れず、最後にはそこに戻ってくること。「してもしなくても本当はどっちでもいいこと」にそれらを邪魔させないことです。

２年生のみなさんは後期に突入し、進路についてより一層真剣に考える時期となりましたね。１か月後か半年後か１年後、はたまたもっと先か、、自分が本当に「したいこと」をできているように今、この日を頑張りましょう！先生もがんばります！

（文責：　槇田）

♫1年の窓♫

悔いのない生活を

高校生の君たちには興味がない話ですが、最近高石友也さんという歌手が亡くなりました。彼の曲に私が学生時代に聞いた「受験生ブルース」があり、その一部に「朝は眠いのに起こされて　朝飯食べずに学校へ　１時間目が終わったら　無心に弁当食べるのよ　（中略）大事な青春無駄にして　紙切れ一枚に身を託す　まるで河原の枯れすすき　こんな受験生に誰がした　（後略）」とあり、受験生の悲哀などを面白く歌っていました。（全体の内容は笑える歌詞です調べてください）

さて、今回は受験について考えます。今は高校の教員をやっている息子が受験生の時に「お父さんとお母さんはセンター試験も受けずに国公立大学に行った。ズルい　」（その時の彼にとって、センター試験なしの国公立大学合格は考えられない）といわれました。確かに私たちはセンター試験（共通テスト）が存在しないときに受験をしました。私は第一次ベビーブームに生まれた世代（団塊の世代）の少し後に生まれ、まだ子供が多く（受験生も多く）１年の中で１回しか行われない受験で一生が決まるため受験戦争はとても激しかったかった時代です。それを緩和するため機会の均等と機会を増やすため共通テストを受けてからの各大学への受験などに変更され、またペーパー試験だけでなく、ほかの能力での受験も増えてきました。私から見て君たちは同世代の数が少なく倍率は下がっていると考えられますが、自分の希望する大学に行こうとすると我々の時代の受験戦争と同じです。ただ、大きく違うのはペーパー試験のみでの合格もありますが、今はその人の能力全般を見て多様な人材を大学は欲しているので、いろいろな枠組みで合格させようとしています。１，すべての教科を満遍なく勉強して能力を上げる　２，自分の好きなことを見つけ、全国などで１番を取る。どの道でも集中すべき目前の課題に集中しきれていない人が散見します。それでは成果は出せません。一つ一つ丁寧にやり、どんなことでも勉強も含め全力を尽くし悔いのないようにすることが、受験戦争に対しての一番の対策だと思っています。

（文責：６９歳の川嶋）